

聖書: 第一列王記22章1~23節

説教: 羊飼いのいない羊の群れのように

はじめに

北イスラエルの王であるアハブは、自分の家の隣にあった畑の持ち主であるナボテに畑を売って欲しいと話を持っていくのですが、ナボテは「先祖のゆずりの地を他人に売るなど絶対にあり得ない事だ」と言って断ります。アハブの妻イザベルはこれを聞いて策略をめぐらし、ナボテが住むイズレエルの人々に手紙を書き、ナボテに無実の罪をかぶせて石打ちの刑で殺すよう命令し、人々は言われたとおりにナボテを殺してしまいました。

アハブがナボテの畑を取り上げようと喜び勇んで出かけて行くとき、預言者エリヤが遣わされ、アハブとその子孫、そしてイザベルに対するさばきのことばを語ります。これを聞きアハブは自分の外套を裂き、身に荒布をまもって断食をし、打ちひしがれて歩き出す。神はこれをご覧になり、「彼がわたしの前にへりくだっているので、彼の生きている間はわざわざ下さない」と約束し、アハブの罪をお赦しになりました。

今日はその続きです。今回はアハブは神の前に罪を悔い改めて信仰者になったと思ったのですが、今日の所を読むとどうもそんな単純な話ではなさそうです。これはどういうことか。ともに見てまいります。

1 戦いに出て行くべきかどうか

1) イスラエル王ヨシャファテとイスラエル王

北イスラエルと南ユダに分裂した当初は互いに仲が悪かった二つの国でしたが、時間が経つにつれユダの王ヨシャファテとイスラエルの王アハブが親戚同士となり、同盟を結ぶ関係になっていたようです。2節に「ユダの王ヨシャファテがイスラエル王のところに下って来た」とあるのはそのような事情です。アハブはこの機会に、かねてからの懸案であったラモテ・ギルアデを敵であるアラムから取り戻すための戦争を仕掛けたいので、是非協力して欲しいとヨシャファテに持ちかけます。信仰者であったヨシャファテはすぐにこう言います。4節。「まず、主のことばを伺ってください。」

2) 四百人の預言者

そこでアハブは四百人の預言者を集め、「ラモテ・ギルアデに戦いに行くべきかどうか」と尋ねると、みな口をそろえてこう言う。5節後半。「あな

たは攻め上ってください。神は王さまの手にこれを渡されます。」アハブは、王としての力を誇るために四百人の預言者を集めたつもりだったのでしよう。しかし信仰者であったヨシャファテは、この人たちは偽りを言っていることを見抜き、このように言います。6節。「ここには、われわれがみこころを求めることのできる主の預言者が、ほかにいないのですか。」

2 預言者ミカヤ

1) 真実を告げよ

アハブは答えます。8節。「他にもう一人、主に伺うことのできる者がいます。しかし、私は彼を憎んでいます。彼は私について良いことは預言せず、悪いことばかりを預言するからです。イラムの子ミカヤです。」ヨシャファテはこれを聞き、「そう言わないで、ミカヤを呼んでください」とアハブをなだめて呼ぶことにさせます。

二人の王の前に呼ばれたミカヤが開口一番に言ったことばはこうでした。「あなたは攻め上って勝利を得なさい。」すぐにおわかりのように、先ほどの四百人の預言者が語ったことばと同じです。王が怖かったので本当のことを言えなかった、のではありません。この後、彼は王の不興を買い、牢に閉じ込められ、わずかな食事と水ですごさなければならなくなります。そのことを覚悟の上で王の前に出て来ています。それなのになぜこのような見え透いたことをするのか。アハブにこう言わせるためだったと思われれます。16節。「私が何度おまえに誓わせたか、おまえは主の名によって真実だけを私に告げるようになるのか。」

アハブはミカヤを憎んでいたはずなのに、ミカヤが他の預言者と同じことを言いだすと王は怒り、真実を言えと迫る。実に不思議な場面です。とにかくアハブの命令によって、ミカヤは隠すことなく真実を告げることになります。17節。「私は全イスラエルが山々に散らされているのを見た。まるで、羊飼いのいない羊の群れのように。そのとき主はこう言われた。『彼らには主人がいない。彼らをそれぞれ自分の家に無事に帰らせよ。』」

イスラエルが羊飼いのいない羊の群れのようになる。すなわち、イスラエルには王がいなくなる。王が倒れてこの戦争は負ける。そう言った。

2) アハブを惑わすために

これを聞いてアハブはだんだん不機嫌になっていきます。でもミカヤはそんなことなど気にもかけずふうもなくことばを続けます。そこで明らかにされたのは、神がアハブをラモテ・ギルアデに攻め上らせ、そこで倒れさせようとしていること、そのためにわざわざ会議を開き、惑わす霊を送り、預言者たちが偽りのことばを語るようにさせていたということでした。四百人の預言者は、アハブの耳には心地よいことばを語ったかも知れないが、実はそのようにして主はアハブにわざわいを告げられたのだと明らかにします。

3) 二つの疑問

これを読んで、神はこのようなことをするのかと驚きます。そして二つの疑問が湧いてきます。一つ目。神はいつも正しく公平であって、間違ったことはなさない。そう信じています。それなのに、なぜ神は預言者たちが偽りを言うようにと仕向けるのだろうか。二つ目。前回のところでアハブは、「彼の生きている間はわたしはわざわいを下さない」と告げられたはずではなかったのか。それなのに神はなぜわざわいを下さるとされるのか。神の心は猫の目のようにころころ変わるといえるならば、今私たちが赦されているといわれても明日どうなるのかわからない。そういう不安と結びついていきます。

3 神

1) 王の名前の扱い方

そのことを考えるヒントはどこにあるのか。意外なところにある。今日の所で登場する二人の王の名前がどう取り扱われているか、そこに注目します。まず2節です。「しかし、三年目になって、ユダの王ヨシャファテがイスラエルの王のところを下って来ると。」ユダの王については王の名であるヨシャファテと一緒に並べられています。ところがイスラエルの王のところには名前がない。ここはバランスを取るために「イスラエルの王アハブ」と言うのが自然でしょう。たまたまここだけ抜けているのかと思ったらそうではない。22章の彼が死ぬ所までに、「イスラエル王」あるいは明らかにイスラエル王を指すという意味での「王」という表現は三十回出て来るのですが、「アハブ」はたった三回しかなくて、「イスラエル王アハブ」という言い方は全く出て来ない。明らかに「イスラエル王」と個人としての「アハブ」を区別して扱っていると考えざるを得ないのです。

2) アハブの罪は赦された

そのことを頭に入れながら、もう一度過去のことを調べ直してみる。ナボテが無実の罪をかぶせられて殺された事件です。この事件に関わったのは誰か。主犯格はもちろんイゼベルでした。では共犯は誰か。アハブと書かれている。でもイスラエル王とは書かれていません。この事件の後、預言者エリヤが来てさばきのことばを語り、アハブが悔い改めるわけですが、そのとき神はなんと言われたか。21章29節。「アハブがわたしの前にへりくだっているのを見たか。」ここはアハブです。それでアハブ個人としての罪は赦されたということになる。

3) イスラエル王の責任を問われる

聖書が、アハブ個人とイスラエル王と二つの側面を区別しているというのなら、次に問題になるのはイスラエル王としての罪はどうなったかでありませぬ。21章29節には、「イスラエル王アハブがわたしの前にへりくだっているのを見たか」と書かれていない。イスラエル王としての罪はまた別の扱いです。

ではいったいアハブは、イスラエル王としてどんな罪を犯したのでしょうか。彼がかつてアラムと戦ったときのことで。神の助けによって戦いに勝ち、敵の王であったベン・ハダドを捕虜として捕まえたのに、彼は和平条約を結んで、そのまま解放したことがありました。そのとき預言者が現れ、イスラエルの王にこう告げました。20章42節。「主はこう言われる。『わたしが聖絶しようとした者をあなたが逃がしたので、あなたのいのちは彼のいのちの代わりとなり、あなたの民は彼の民の代わりとなる。』」

ここは「アハブ」ではなく、「イスラエルの王」となっている。この罪によって彼はわざわいを受けなければならない。それで神が預言者の口に偽りを言う霊を授けた、そのような事情です。

4) イスラエル王としてさばかれるイエス

なぜこんな複雑なことをするのでしょうか。アハブであろうが、イスラエル王であろうがどちらでも同じではないか、と思うかもしれませんが。でも聖書はこの区別が重要であることを強調します。イスラエルの王である者の責任はそれほど重いのだと言おうとしています。どんな責任なのでしょう。ミカヤが言っています。「まるで、羊飼いのいない羊の群れのように。」私たちは神の羊であり、イスラエル王は羊飼いです。イスラエルの王は神の羊をゆだねられていました。しかしアハブのよう

に多くのイスラエル王は罪を犯して倒れ、残された羊たちは羊飼いのいない群れになってしまいます。だからイエスはイスラエルの王として来ることになった。また同時に私たちの羊飼いとして来ることにもなりました。どんな羊飼いであったか。ヨハネ10章11節「わたしはよい牧者です。良い牧者は羊のためにいのちを捨てます。」

羊のためにいのちを捨てる羊飼いなど常識では考えられません。でも旧約の時代からすでに神は、イスラエル王に対してそれほどの責任を要求していました。だから、神はわざわざ会議を開き、イスラエル王アハブにわざわいを告げなければならなかったのです。

私たちの羊飼いとして来られ、王としてさばきを受けられた主イエスの御名をあがめます。